

初期生育の促進拡大が力ギ

指導部顧問 松浦 一 宇

作る自由・売る自由と言われて久しいが、いよいよ国は需給調整を現場にまかせた。

市場原理にゆだねられて以来、産地間競争が激化、農家同士がお互い競争相手と化して、これまで築かれて来た「共存共栄」と言った絆もこわれつつある状況下で、需要（消費）に見合った供給（生産）のバランスが保たれるのか、不安は解消されないままだが、待ったなし今年の米づくりが始まる。

厳しい状況である程に、高品質良食味の多収が経営安定の絶対的条件であるが、近年、米の収量が少なくて困ったと言った声が多いので、その原因と改善策をさぐってみた。

透水性を高める

圃場が大きくなった事などから機械も大型になり踏圧により透水性が低下した為に根の健全育成に支障を来していると言われている。

また、浅耕により、根域が狭くなったたり、生ワラが少くない作土にまぜられる程に田ワキが激しく成り初期生育停滞に繋がっている。改善策として写真1と2にあるようなハーフソイラやスタブルカルチ等により耕深の確保と透水性



写真1. ハーフソイラ



写真2. スタブルカルチ

それを嫌って焼いてしまう農家もあったが、地力維持に努力した大方の農家は、腐蝕を促進するために表1に示すように、石灰チツソやヨウリンケイカルといった資材をワラの上に散布して腐蝕に努めたものである。筆者も粉状石灰チツソを10a当たり現物10kgを、マスキをして散布したものである。効果は抜群であったが、ササニシキ時代であったので2年目からは基肥チツソを1/2削減するほど地力も高まることを記憶している。また、腐蝕促進材散布と併せて秋耕することと効果がさらに高まることを体験している。低米価では土改材の施用まで手が回らないといった声もあるが、転炉石灰のような格安な資材もあるので、経営の許す範囲での努力はしたいものである。

を良好にできる。

留意点としてはハーフソイラの場合、深耕すぎると耕盤が凸凹になり、田植機がまっすぐ走行しずらくなったりするので、後の作業も考えた適度な耕深の確保にとどめることも大切である。

透水性、特に圃場に貯留（かんがい保水）した水が縦移動することにより、まだ気温の低い田植え直後でも、地温が縦移動のほとんど無い（透水性に欠ける）圃場より早期に高まり、施肥されている基肥も早く分解してイネに吸収されることから初期生育の促進拡大に繋がる。

生ワラ分解に伴う

田ワキの軽減に努める

イネが活着して、やっと元気が

初期チツソ吸収を

高める

何事も「初心に返る」の教えがあるが、箱苗の機械移植が導入された当初は、育苗期後半には根付け肥、移植直前の育苗肥を施肥して、素早い活着と分けつと初期生育の促進拡大に向けた手法がとられたものである。

特別栽培が開始されて以来、特に育苗期からの施肥量（化学合成分）まで制約を受けるようになり、慣行栽培も含め、全体的に本田初期にイネのチツソ吸収量が低くなっているように思われる。

植物全体にいえることと思うがイネの場合も栄養生長期は特にチツソ吸収量が少なく活力が出ないようである。

繰り返しになるが、根付け肥・育苗肥・移植後の活着肥、さらには側条施肥といったように、施肥方法の工夫もしながら初期のチツ

表1. 初期生育のとれにくい原因と対策

(松浦)

初期生育の阻害要因	有効な対策
大型機械の踏圧による透水性の低下	ブラウ耕やスタブルカルチ耕等での耕深による透水性の改善
生ワラの分解遅延	秋耕や石灰チツソやヨウリンケイカル等の腐蝕促進資材の施用
初期（田植え直後）のイネのチツソ吸収不足	移植時の育苗肥や田植え直後の活着肥。側条施肥など
漏水等で水持ちが悪い	ケラ、ネズミ穴等を畦畔塗り等で漏水を防ぎ、地水温上昇に努める

出て来たのも束の間、田ワキが激しくなつて分けつに支障を来すといった生育パターンが多いようである。

昔、バインダー刈り、杭掛け、自然乾燥した時代は、特に乾燥したワラほど腐蝕しにくいことから翌年の初期生育阻害に繋がるため、

ソ吸収を高め、初期生育を促進拡大して8葉期（総葉数13枚の稚苗）には有効茎（目標葉数）が確保される余裕のあるイネづくりが基本である。

尚、活力に欠けている特栽培ほど除草剤等の薬害も受け易く、大きなダメージを受けているようである。

漏水を防ぎ 保温的水管理を

水持ちを良くして、保温的水管理にすることの重要性はいまさらいうまでもないが、簡単なようで意外と守られない圃場も散見される。畦塗り機の普及も著しい。ケラやネズミ穴等は畦塗りを実施し、保温的水管理や除草効果を高めることが重要である。

近年の傾向として、塩基置換容量の高い粘質土壌ほど、また、特別栽培ほど初期生育に難儀しているようである。初期生育促進拡大に繋がる工夫が大切である。